

# 室積（光漁港）の「みなと文化」

宮本 雅明

---

## 目 次

第1章 室積港の整備と利用の沿革	85-1
1. 古代・中世の室積港	85-1
2. 近世の室積港	85-1
(1) 町並みの形成	85-1
(2) 室積港の復興	85-2
3. 近代の室積港	85-3
第2章 「みなと文化」の要素別概要	85-4
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」	85-4
(1) 芸能	85-4
(2) 信仰	85-4
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	85-5
(1) 物資の流通を担う産業	85-5
(2) 行政施設	85-5
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	85-6
(1) 港湾関連産業	85-6
(2) 港湾利用産業	85-7
(3) 産業風習	85-7
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	85-7
(1) 遊里	85-7
(2) 祭り	85-7
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	85-8
(1) 港・海運に関する歴史的施設	85-8
(2) 港町の町並み	85-9
(3) 港町の景色	85-10
第3章 「みなと文化」の保存と振興の動き	85-11
1. 「みなと文化」保存の取り組み	85-11
(1) 早長八幡宮祭礼の山車と踊山の文化財指定	85-11
(2) 町並み調査と保存事業の実施	85-11
(3) 光ふるさと郷土館別館磯部家住宅の国登録有形文化財への登録	85-12
2. 「みなと文化」再生の取り組み	85-12
(1) 光ふるさと郷土館の設置	85-12
(2) 海浜公園の整備とみたらい燈籠堂の復元	85-13
(3) 普賢寺今昔市の開催	85-13
〔参考文献〕	85-13

所在地：山口県光市

港の種類：漁港

港格：第二種漁港



【位置図】



【現況写真】(室積観光ホスピタリティ推進協議会)

## 第1章 室積港の整備と利用の沿革

### 1. 古代・中世の室積港

周防五浦の一つ室積は穏やかな室積湾（御手洗湾）に面し、砂嘴をなす象鼻ヶ岬によって周防灘からの風を遮られた天然の良港で、古来、瀬戸内海航路の要衝を占める港町として繁栄した。室積の名が見えるのは、12世紀半ば成立の『本朝無題詩』に「於室積泊即事」とあるのが最初で、港の南側を限る峨眉山一帯の風光明媚な景色とともに、平安時代から詩歌にも歌われてきた。以来、「海の菩薩」として広く信仰を集めてきた普賢寺への参詣客や、内陸や大陸との交易に従事する商人・海賊の寄港地として大いに賑わってきた。

古代から中世にかけて、町の発展の礎となったのは寺社であった。寛弘3年（1006）開創とされる普賢寺は、漂着した普賢菩薩の像を本尊とし、創建後ほどなく峨眉山麓に伽藍を構え、漁民や航海者の信仰を広く集めた。室積はこの普賢寺の門前町としての性格を併せもっていた。

後に町並みのもう一つの核をなした早長八幡宮も、文安元年（1444）宇佐八幡宮から勧請の際、普賢寺の近くに奉られた。宮ノ脇の御旅所がその故地ともいう。中世から近世初頭にかけての室積の町並みは、普賢寺一帯を中心として展開したと推定される。この普賢寺領は、近世に入っても安堵されたが、室積は大半が萩藩の蔵人地となった。

### 2. 近世の室積港

#### （1）町並みの形成

近世以降、室積の港と町並みの発展を支えたのは、日本海から大坂へ向かう西回り航路の開発に伴う諸国回船の入港であった。寛文元年（1661）早長八幡宮が宮町の現在地に遷宮された。神幸祭に引き回される山車も、寛文期に台若・御鏡山・曳船、元禄期に鳥居・石燈呂・踊山・高麗犬・随神山が造られたと伝わるので、この頃、すでに町並みは普賢寺門前から八幡宮門前まで展開していたようだ。この早長八幡宮の遷宮を契機として、町並みはさらに北方の江ノ浦へ延びていったと考えられる。

元文3年（1738）の成立になる『地下上申』と『地下上申絵図』は、各村落より村勢概要を萩藩に上申したもので、室積の町並みの具体像を最初に窺うことができる史料である。

『地下上申絵図』に描かれた室積の町並みは（図-1）、千坊山の南裾と陸繋島である峨嵋山とを結ぶ砂洲上に、全体がY字状をなして展開する。峨嵋山に抱かれた地に堀で囲われた普賢堂が見え、その南側に普賢寺、普賢堂を挟んで北側には廃寺となった潮松庵が見える。

普賢寺門前から北へ一本の通りが、高札場の置かれた三叉路に向かって延び、この通りに沿って両側に南町・北町の町並みが広がり、室積の骨格をなしている。町並みの東裏手は海岸で、石垣と浜が描かれ、浜へ向かう脇道が5本描かれる。北町には元和期の再興と伝えられる専光寺があり、やや北側に浜へ通じる道の正面に藩の「御蔵」が見える。



〔資料〕山口県文書館編「絵で見る防長の町と村」

【図-1 「地下上申絵図」に見える元文3年の室積】

『地下上申』によると、御蔵には勘場・番所・米蔵が置かれたが、絵図に描かれた3棟の切妻造の建物がこれらに当たるのであろう。高札場には高札と物成札が掲げられたが、これらも描かれている。この札場から西北方の徳山へ向かう通りに沿って新市・西ノ浜（西ノ浦）の町並みが描かれ、東方の柳井へ向かう通りに沿って、早長八幡宮の鎮座する江ノ浦の町並みが連なっている。享保の大火後、間もない時期ながら、町並みの広がる範囲は、今日に残される伝統的町並みと大きくは異なる。

普賢寺の門前から南へも通りが延び、宮ノ脇に片側町が広がり、その先の御手洗には、早長八幡宮の故地と見られる八幡の休所と稲荷宮、やや離れて藩の御船蔵が置かれている。象鼻ヶ岬には海蔵寺と大師堂、さらに突端には灯炉堂が見える。南町の西裏手には、普賢寺御免除地が見え、中に小庵と畠が描かれている。

## （2）室積港の復興

こうして発展を遂げた港と町並みも、享保期に始まる漁業の不振によって次第に衰微した。加えて享保16年（1731）に室積浦100軒以上に及ぶ大火、翌17年には大飢饉、さらに同18年には、普賢寺本堂をはじめとして226戸を焼失した室積浦大火など、度重なる災禍を被った。普賢寺を始めとして町並みの大半を失い、早長八幡宮の山車・神具も焼

失した。だが、これら災禍に関わりなく普賢寺への信仰は衰えず、宝暦4年（1754）に再興された玉垣の寄進者の出身地には、新発田・富山・羽咋など日本海岸の地名も見える。

この室積が海港として本格的に復興を果たすのは、萩藩七代藩主毛利重就の治世下においてであった。宝暦11～12年（1761～62）萩藩は検地を断行して撫育方を新設し、新規事業の展開を企てた。その事業の一環として、藩では北国や九州の回船を誘致するため、室積港の復興を図った。明和元年（1764）の港湾整備に始まり、安永2年（1773）に米蔵を新設、同7年には撫育方の役所として室積会所を設置した。この時期、撫育方は下関と中関の港の整備も果たしており、室積の復興は、萩藩の広域にわたる経済政策の一環として行なわれた。

港町としての室積の復興は、先述の宝暦検地の翌年、宝暦13年（1763）に干鯛市が立てられたことに始まった。続いて明和4年には、古い家屋154軒が建て込んだ江ノ川東側の江ノ浦において、人の往来、漁具運搬、火事の心配などを考慮して幅2間半の小路を長さ2町程にわたって通し、左右に屋敷を配する町並み整備が行なわれた。

同じ時期、湯屋1軒の営業が許可され、明和6年には江ノ浦、南町、新市の三ヶ所で日用品の市が許可された。続いて海岸には波止場が建設された。文化2年（1805）に会所の波止が建設され、天保2年（1831）に普賢寺門前の波止と早長八幡宮門前の波止が建設された。会所の波止は専ら公用回船の荷揚げに利用されたのに対し、八幡波止は小舟の係留と荷揚げに利用された。諸国の回船や客船が利用したのは普賢波止で、諸国の商人や普賢寺への参詣客で賑わった。文化3年（1806）この普賢波止に寄港した尾張の豪商吉田重房は、「入り海の湊にて其様任し。人家二百軒計り、問屋・遊女屋などもあり。」と、町並みの様子を『筑紫紀行』に記している。

こうして宝暦の検地に始まる一連の事業によって、町並みは「海商銀座」と呼ばれる程の繁栄を見せるに至り、今日に伝えられる町並みの基盤が形造られた。普賢寺の玉垣・石橋、早長八幡宮の石鳥居・玉垣、普賢・八幡両波止の石灯籠など、町並みの随所に残される石造物には、18世紀後期、宝暦から寛政・文化期にかけての年紀を有するものが多いことがその証である。だが、道路網や町割など町並みの骨格は、元文3年（1738）と大きく異なることはなかった。

### 3. 近代の室積港

明治期に入っても、室積の繁栄はしばらく続いたが、明治30年（1897）に開通した山陽鉄道が室積を通らず、室積は陸海両運の結節点となる機会を失し、衰退への道を歩むこととなった。その結果、かつての繁栄を伝える町並みが残され、また町並みを取り巻く自然、国の天然記念物に指定された峨嵋山の樹林、御手洗湾の風光なども損なわれることなく、今日まで伝えられることとなった。

札ノ辻を中心に北町・南町・向町・宮町の一带には、江戸後期から明治期にかけて建てられた町家が数多く残され、かつて「海商銀座」とも呼ばれた、風格漂う町並み景観が今に伝えられている。母屋の両側に庇を付した妻入りの入母屋造が基本だが、古いものには切妻造、新しいものには平入りの町家も見られ、残された町家の形式は多様である。だが、平成3年（1991）の台風被害を契機として、数多くの町家が取り壊され、室積らしい町並み景観が失われつつある。

## 第2章 「みなと文化」の要素別概要

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 芸能

##### ①祭り囃子

北海道松前から西回り航路を航行した北前船の帆巻き唄が起源とされ、江戸末期以来、早長八幡宮の祭礼時において山車を曳き回す際に唄われる。

##### ②木遣り唄

北海道松前から伝わった木遣り唄で、力仕事を行う際に唄われるが、近年では祝い唄としての性格が強く、船歌の影響を受けている点に特徴が見られる。早長八幡宮の祭礼時に山車を曳き回す際にも唄われる。

#### (2) 信仰

##### ①早長八幡宮

早長八幡宮は宮町に鎮座し、普賢寺と同様、御手洗湾に向かって社地を構える（図-2）。文安元年（1444）8月、豊後の宇佐八幡宮より勧請され、西ノ浜付近の早長の瀬へ着船したため、早長八幡宮と名付けられたと伝えられる。現在地へは寛文元年（1661）に遷宮なったもので、当初は峨嵋山の中腹、脚立山に祀られていたとされ、普賢寺の南側一帯に宮ノ脇の地名が残されている。港町として繁栄を誇った室積の氏神として広く崇敬を集めた。

社殿は海に向かって東面する神殿と釣殿、拝殿から成る。周りを取り巻く玉垣に文化6年（1809）の刻印が見られるが、建築年代が江戸期に遡るのは拝殿のみで、建築様式から判断して18世紀末の建立と見られる。盛大な秋祭りの執り行われる神社として、普賢寺と同様、八幡波止に向かって参道を開いた構成はいかにも室積らしい景観を形成している。



【図-2 早長八幡宮】

##### ②普賢寺

普賢寺は漂着した普賢菩薩の像を祀った播州書写山の性空上人によって寛弘3年（1006）創建されたと伝えられる。当初は大多和羅山にあったが、暫くして峨嵋山麓の現在地に移され、「海の菩薩」として漁民や航海者の信仰を広く集めた。藩政期には毛利氏の祈願所として、寺領九石五斗、切米五石を給され、藩直営の御手普請寺として遇され、臨

濟宗建仁寺派に属す。

室積の町並みの南方、峨嵋山の北麓に御手洗湾に面して寺地を構える。真東に突き出した普賢波止から参道が延び、正面に建つ寛政 10 年（1798）建立の仁王門（図-3）を通って参道を進むと、周りを堀で囲われた天明 8 年建立の普賢堂があり、中に海の守護神として崇敬を集める普賢菩薩が安置される。普賢堂の南方には嘉永 7 年建立の本堂と文化 10 年建立の庫裏を中心とした普賢寺の境内が広がり、正面には 17 世紀初期建立の山門が建ち、本堂南側には雪舟作と伝えられる庭園があり、山口県指定名勝となっている。



【図-3 普賢寺仁王門】

### ③大師堂

象鼻ヶ岬の先端の地は、弘法大師が唐から帰朝の際立ち寄り、七日七夜の護摩供養を行い、自像を刻んで厨子を彫って安置したと伝わる霊場で、弘法大師像と御手洗観音を安置した入母屋造の小堂が残され、大師堂と呼ばれている。今日も毎月 21 日に「お大師さま」が挙行されている。

## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### （1）物資の流通を担う産業

#### ①回船問屋

天保 12 年（1841）の調査になる『風土注進案』によると、580 軒を数えた室積浦のうち、商人で回船持ち 3 軒、単独で回船持ち 41 軒を数え、回船数 44 隻と一致を見る。町別では回船持ちは北町、江ノ浦・新町に居を構え、回船乗りは宮ノ脇、南町に居を構えたことが知られる。

回船問屋として著名な今津屋五郎兵衛は北町、符野屋又兵衛は南町、豊後屋六左衛門は南町に屋敷を構えた。符野屋の屋敷遺構として熊谷家、豊後屋の屋敷遺構として竹下家、丸屋文助の末裔江田家の屋敷遺構、今津屋の屋敷遺構として三谷家離れ屋が現存していたが、熊谷家は近年取り壊された。

### （2）行政施設

#### ①米売捌会所

萩藩は藩財政再建のため、宝暦 11～12 年（1761～62）に検地を断行し、翌 13 年、検

地で得た新財源を運転して良港整備や新田開発など、積極的な殖産興業を行なうため、撫育方を新設した。萩本藩には恵まれなかった良港を確保するため、明和元年（1764）撫育方は豊浦郡下関、佐波郡中関とともに室積港の整備に着手した。続いて年貢米の売捌きと越荷業務の拡充を図るため、安永2年（1773）から同8年にかけて、室積浦御手水（宮ノ脇）の地に米売捌会所と米蔵を新設した。この室積会所の業務は順調に発展し、寛政5年（1793）には会所は約2倍の広さに拡充された。幕末に至るまで活発に業務を展開した。室積会所の設置に伴い、北町にあった勘場と米蔵は廃されたが、番所はその後も北町に残された。室積会所の跡地は現在、山口大学教育学部附属小学校の敷地となっている（図-4）。



【図-4 象鼻ヶ岬より室積会所跡と峨嵋山を望む】

## ②米蔵

安永2年（1773）から同8年にかけて建設された御米売捌会所とともに御米蔵も建設され、安永9年にはさらに米蔵3棟が領内から移築され、天明2年（1782）には銀子蔵が建築され、天明3年には蔵が移築され、享和9年にも蔵が建設された。天保11年（1840）に一部は下関に移築されたが、嘉永6年には敷地を拡大して囲碁用の土蔵が建設され、江戸期を通して十全に機能した。現在は山口大学教育学部附属小学校の敷地となっている。

## 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

### （1）港湾関連産業

#### ①造船業

天保12年（1841）の調査になる『風土注進案』によると、580軒を数えた室積浦のうち、船大工は23軒を数え、町別に見ると、北町に居を構えていたことが知られる。船大工として知られる柳井屋の屋敷遺構として柳井家が現存する（図-5）。





【図-5 船大工を営んだ柳井屋の町家建築遺構】

## （２）港湾利用産業

### ①漁業

『風土注進案』によると、580軒を数えた室積浦のうち漁師は117軒を数え、町別に見ると、西ノ浦、江ノ浦・新町が漁業を第一にしていたことが知られる。

## （３）産業風習

### ①普賢市

普賢市は普賢菩薩を普賢寺に祀った性空上人の命日に執り行われた法要に伴って開かれた市で、『風土注進案』に「正月十三日十四日普賢法会、農雑具其外市立これあり、入用物少々宛買求め来り候。四月十三日十四日普賢法会、正月同様のこと」とあり、両度の市に船に参詣を兼ねて遠来の海民や近在の農民が集まり、近世中期以降の室積港の復興に一役買った。今日では新暦の5月13～15日に催され、植木、陶器、雑貨等の露店が300余りも、境内を越えて南町・北町・新市にも立ち並び、大きな賑わいを見せる。

## 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

### （１）遊里

室積港の遊里は町並みの中に湯屋として2軒が存在し、宝暦期（1751～1764）には休業に追い込まれたが、宝暦13年（1763）の干鰯市の開催を契機として1軒が復活し、明和4年（1767）にはもう1軒も復活し、2軒の許可を得て営業を続けた。湯屋を営んだとされる町家の幕末の建築になる遺構が南町に現存する。

### （２）祭り

#### ①早長八幡宮祭礼

海の守護神として崇敬を集めた早長八幡宮では、10月第1日曜日に盛大な神幸祭が催される。祭礼は九頭と呼ばれる9人の頭屋によって執り行われ、宮ノ脇の御旅所まで、曳船（図-6）、台若など10台の山車と踊山1台を氏子が木遣り唄を唄いながら曳き回す。山車は享保18年（1733）の大火で焼失したが、宝暦7年（1757）に新造されたものが10台、

現在も使われている。山車と踊山は室積の 10 町が管理し、市の民俗文化財に指定されている。



【図-6 早長八幡宮祭礼の曳船山車】（光市ふるさと郷土館蔵）

## ②普賢まつり

普賢菩薩を祀って普賢寺を開基した性空上人の命日を中心とした 5 月 13～15 日に普賢法会が催される。これに伴って開催される縁日を普賢まつりと呼び、門前には植木、陶器、雑貨等の露店が 300 余りも立ち並び普賢市が立って賑いを見せる。本来の命日は 3 月 13 日であるが、いつしか旧暦の 4 月 13 日～14 日の開催となり、今日では新暦 5 月の開催となっている。毎月 17 日は「観音さま」と呼ばれる行事も挙行されている。

## 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

### (1) 港・海運に関する歴史的施設

#### ①会所の波止

『風土注進案』によると、会所の波止は文化 2 年（1805）に建設され、専ら公用回船の荷揚げに利用された。

#### ②普賢波止と八幡波止

『風土注進案』によると、早長八幡宮門前の八幡波止と普賢寺門前の普賢波止は天保 2 年（1831）に建設された。八幡波止は小舟の係留と荷揚げに利用され、普賢波止（図-7）は諸国の回船や客船の利用に供され、諸国の商人や普賢寺への参詣客で賑わった。



【図-7 普賢波止より御手洗湾を望む】

### ③燈籠堂

港への船の出入りを導くため、象鼻ヶ岬突端の御手洗洲先に室積浦の浦年寄松村屋亀松が燈籠堂を元禄 15 年（1702）に建設した。元文 3 年（1738）成立の『地下上申絵図』にも「灯炉堂」として描かれる。

### ④室積台場

幕末に長州藩が藩内の沿岸防備のために築造した大砲を備えるため石を台形断面に積み上げた台場で、象鼻ヶ岬先端の外海を望む地に、弘化 4 年に幕府から許可を得て 3 基が建設された。台風による大波にさらわれ数度崩壊したが、周辺に散乱した土石を集め、2 基を復元したもので、光市指定史跡として保存措置が講じられている。

## （2）港町の町並み

### ①町割

室積の町並みの起源は明らかでないが、11 世紀初期の創建になる普賢寺を核とし、中世を通じて南町から北町にかけて町並みとしての姿を形成したと見られる。近世に入ると、北前船の寄港地として発展を遂げ、17 世紀半ばの早長八幡宮遷宮時には、宮町から江ノ浦にかけて町並みは広がっていった。

18 世紀前期の二度にわたる大火で、町並みは灰燼に帰したが、道路網や町割など、今日に残される町並みの骨格がすでに成立していた。18 世紀後期の室積会所の設置によって回船業が発展し、町並みは復興を果たし、宅地割や建築様式など、今日に伝えられる町並みの基盤が形成された。伝統的町家の多くは、これら回船業で繁栄した江戸後期から明治前期にかけて建てられたものである。

伝統的町並みを支える町割と宅地割も、江戸期以来の構造をそのまま伝え、町並みと一体をなす自然物や工作物などの景観資源も随所に残されている。これらに加え、室積には風光明媚な御手洗湾と峨嵋山もある。

### ②町家建築

現存する町家は、建築年代が 1700 年前後に遡るものから、18～19 世紀に遡るもの、さらに明治・大正期のものまで、建築年代が広範に及ぶ点の特徴である。特筆すべき上質の町家は少ないが、群として見た場合、量と質の両面において、保存・再生を図るべき価値を備えていると言える。

町家の構造形式は、妻入り入母屋造棧瓦葺が基本であるが、古いものには妻入り切妻造や本瓦葺、新しいものには平入りの切妻造も見られ、明治期には寄棟造も現われる。妻入り・平入りともに、主屋の両側に庇を付し、本瓦を屋根の両端と中央に葺いて、アクセントとするのが一般的である。

一階の表構えは、主屋柱筋にブチョウをはめ込み、庇柱筋を出格子とし、出入り口は脇に戸袋を設け、板戸を引き込んだようだ。

町家の間取りは、南側に通り土間を設け、それに沿って居室を奥に向かって複列に並べる。表の間を開放とし、奥の間上手に座敷飾りを備え、中の間下手上部には大型の神棚を設け、中の間上手を納戸とするのが基本である。

### ③寺社建築

寺社建築も、町並みの形成において重要な役割を果たし、現在も町並みと深い関わりを

保つ普賢寺と早長八幡宮が、江戸期に遡る建築群と樹木などの景観資源を残し、伝統的町並みの核としての役割を果たしている。

普賢寺の庫裏・書院・本堂・山門・仁王門は、いずれも建築年代が江戸期に遡り、建築の質も高い。これら建築群から構成される境内は、本堂南側の庭園、書院の庭園や中庭と一体となって上質の伝統的な空間を形成し、特筆すべき存在である。周りを取り巻く自然環境も相俟って、貴重な境内空間を形成している。

### （3）港町の景色

#### ①象鼻ヶ岬と峨嵋山の景観

峨嵋山は室積の象鼻ヶ岬にそびえる海拔 117m の低山で、湾外の周防灘に面した海岸線は断崖絶壁をなし、奇岩怪石に富む景勝地としても知られ、山容が中国四川省の峨眉山に似ているところから命名されたとされる。

峨嵋山一帯は江戸時代には萩藩直轄の御立山とされ、人々の入山を禁じたため、暖地性常緑広葉樹のシイノキ（主にスダジイ）・タブノキ・モチノキ・ヤマモモ・コバンモチ・クロガネモチなどや、暖地性低草のオオカグマ・ベニシダ・ツルコウジなどの植生がよく維持されている。

昭和 2 年（1927）には大阪毎日新聞主催の日本新八景百選の第 7 位に選ばれ、同 7 年には峨嵋山樹林が国の天然記念物に指定された。近年、マツクイムシや度重なる台風の被害によってマツが多く枯死したものの、象鼻ヶ岬と峨嵋山が造る景観は、港町室積に欠かせない景色として広く親しまれている。

#### ②普賢寺庭園

普賢寺方丈の南庭に位置する枯山水の庭園で、雪舟の築造と伝えられる。方丈側から向かって左奥に三尊石組による枯滝を組み、前面を池に見立てた枯池式枯山水の庭園で、枯滝を中心にして左に山形の横石を据えて遠近感を強調、また横石の前面は海景となり、石組みは小振りで弱くなっている。庭園は西側からも観賞できる構成を呈し、雪舟以降、本格化する枯山水庭園の早い時期の作庭として山口県の名勝に指定され、保存措置が講じられている。

### 第3章 「みなと文化」の保存と振興の動き

#### 1. 「みなと文化」保存の取り組み

##### （1）早長八幡宮祭礼の山車と踊山の文化財指定

早長八幡宮は文安元年（1444）に室積浦の氏神として豊前国宇佐八幡宮を勧請したことに始まる。当初は普賢寺前の宮ノ崎に鎮座したが、寛文期に現在地に遷座した。毎年秋の例祭に合わせて、神社の形態を模した台若・鳥居・石燈呂・高麗犬・随神山・御鏡山・曳船の7種類計10輛から成る山車と踊山の引き回しが行われる。

台若・御鏡山・曳船の3輛が寛文年間（1661～72）に造られ、元禄期（1688～1703）に鳥居・石燈呂・高麗犬・随神山が造り足された。享保18年（1733）の大火によって山車も焼失したが、宝暦7年（1757）に再建され、今日に至っている。踊山は台上を舞台として民俗芸能を奉納する山車で、文化期（1804～17）に造られた。

神社の形態を整えた山車を曳くのは全国的に見ても特異であり、昭和56年（1981）に市の有形民俗文化財に指定され、保存措置が講じられている。

##### （2）町並み調査と保存事業の実施

「光市アメニティタウン計画」に基づく「歴史とであいのあるまちづくり」の一環として平成5年度（1993）に町並み調査が実施され、調査成果は『室積－光市室積伝統的町並み調査報告書』にとりまとめられた。その成果に基づいて町並み保存事業が進められた。

保存事業は、室積の表通りである海商通りを対象地区とし、地区内に残される明治期以前の建築になる家屋のうち、伝統的様式を保っている家屋を対象家屋とし、当該家屋の改築もしくは新築に伴う修復もしくは門・塀などの修景に対して一定の基準を設けて補助を行うことが定められ、平成8年度以降、暫時事業が進められ、数棟の伝統的建築物の修復（図-8）及び新築建築物の修景がなされてきたが、一定の成果を挙げたことにより、平成16年の光市と大和町の合併に伴って制度は廃止された。

近年、町並みを構成する熊谷家などの重要建築物が相次いで取り壊され、町並み景観の保存に向けての動きが止まったかの観がある。



【図-8 修復後の伝統的町家建築（平入り町屋）】

### （3）光ふるさと郷土館別館磯部家住宅の国登録有形文化財への登録

かつて「磯乃屋」と号して廻船業を営んだ磯部家本家によって明治前期に建築された室積を代表する町家建築の主屋（図-9）、明治後期に建築された離れ座敷及び釜屋の3棟が、平成11年（1999）に国の登録有形文化財として登録された。主屋は妻入りの寄棟造本瓦葺、端正かつ重厚な表構えを呈した上質の町家で、茶室としての造作を備えた海に臨む離れ座敷が庭園を介して建つ。保存修理工事を施した上で、後述の光市ふるさと郷土館の別館として内部が公開されている。



【図-9 光ふるさと郷土館別館】

## 2. 「みなと文化」再生の取り組み

### （1）光ふるさと郷土館の設置

前述の町並み保存事業と並行して設置準備が進められ、ふるさと創生事業の一環としてまた市制50周年を記念し、平成5年（1993）9月に開館した。通りを挟んで本館と別館から成り、本館は「磯民」と号して醤油醸造業を営んだ磯部家の主屋（図-10）と醤油蔵の保存活用を図り、北前船に関する資料や醤油醸造に関わる道具、早長八幡宮に奉納された絵馬、祭礼時に用いられる山車も保存展示されている。

別館は「磯乃屋」と号して廻船業を営んだ磯部家の主屋を国の登録文化財として登録の上、内部を公開している。別館の背後の海に臨む地は海浜公園として整備され、中に象鼻ヶ岬に建てられていた燈籠堂が復元されている。



【図-10 光ふるさと郷土館本館】

## （２）海浜公園の整備とみたらい燈籠堂の復元

象鼻ヶ岬の突端に元禄 15 年（1702）に建設された燈籠堂が、象鼻ヶ岬を望む室積湾岸に平成 3 年 3 月に復元され、室積の「みなと文化」を象徴するモニュメントとして親しまれているが、当初の位置と隔たった位置に復元されたため、歴史的景観の真実性の観点から疑問が残る。



〔資料〕 対馬海上保安部HP

【図-11 みたらい燈籠堂】

## （３）普賢寺今昔市の開催

町並みの活性化を図るため、平成 9 年（1997）より毎月第 4 日曜日に普賢寺今昔市と呼ばれる骨董市が、普賢寺の境内及び門前を中心として開かれ、賑わいを見せている。

### 〔参考文献〕

- ・ 光市史編纂委員会編『光市史』（光市、1975 年）
- ・ 山口県地方史学会編『防長地下上申 1』（山口県地方史学会、1978 年）
- ・ 山口県文書館編『防長寺社由来 2』（山口県立山口図書館、1982 年）
- ・ 山口県文書館調「防長風土注進案 7 熊毛宰判」（山口県立山口図書館、1963 年）
- ・ 山口県文書館編『絵で見る防長の町と村』（山口県文書館、1989 年）
- ・ 『港町室積：光市室積地区伝統的町並み調査報告』（山口県光市、1995 年）
- ・ 『光市の文化財』（光市教育委員会、2008 年）